

立町通り・桐町通り界隈

これまで紹介したエリアは、そのいずれもが時代とともに街の性格・様相を大きく変えてきましたが、ここ桐町通り・立町通りだけは今も昔も商店街、商い一筋の街です。

桐町・立町は大町と同様に古い街で、江戸時代以前からあったことが知られています。江戸時代、桐町には米座がおかれ、米の流通を独占していました。当時、米は毎日の主食というだけでなく、武士の給料も米、農民が納める税も米、すべての基本は米でした。その商いを独占していたのですから、桐町の賑わい

は推して知るべしです。

立町は、桐町に隣接することから、米



桐町通り十日戎（昭和29年）

以外のあらゆる品物をあつかう小売に特化した商店街となります。桐町で米を売った人はその代金を使って立町で買い物

し、桐町で米を買った人は米以外の日用品などを立町で買う、といった具合に、ふたつの商店街の相乗効果でこの界隈は大いに賑わいました。

その繁盛ぶりは、近代にはいつても衰えることはなく、大正の大火後におこなわれた市区改正によって交通の便がよくなると、より一層活気づきます。

昭和四十年代に入ると自動車普及をはじめ、通行量も急増し幹線道路である立町・桐町の通りは車が渋滞するようになりました。さらに平和通りに大型店ができて人の流れが変わり始め



ました。

しかし、四〇〇年近くも続いた商店街は、新しい業種に変えたり、魅力ある商品を提供したり、また駐車場を確保するなど新しい時代に対応しながら商業地としての役割を果たし続けています。

桐町通り

中央通りを北進して、永井屋菓子店のあたりから北端のT字路の両側までが桐町です。ただし、T字路右の東にのびる通りは、大正の大火後に新たに

開削されたもので、元来の桐町はL字形の町でした。

桐町の「桐」とは粉のことで、買い取った粉を搗き屋・精米小売店に売りさばっていた米座の町そのままの名となっています。



桐町通り

現在の桐町で注目すべきは、ドラマチック戎市でしょう。これは、

昭和二十九年（一九五

四）に始められた戎十日市の流れ

をくむもので、桐町商店会の一大イベントです。歩行者天国となつた通りに



西宮戎神社

は、桐町内外からの出店者によるテントが並び、バンドライブや大道芸など一日中イベントが盛り沢山です。この活動が評価され、桐町は経済産業省の「がんばる商店街七選」にも選ばれています。

立町通り

中央通りの北、皇大神社から永井屋菓子店の手前までと、立町の十字路で交差する東西の通りが立町です。ただし、この十字路から南と西にのびる通りは、大正の大火後に新たに開削されたもので、立町もまた元来はL字形の町でした。

立町という名は、「市が立つ町」を意味するといわれています。桐町との関係から一貫して小売に特化した商店街であった立町ですが、画期的な出来事は、これまでに二つありました。

ひとつは、享保四年（一七一九）に福田町から神明社・今の皇大神社が遷座してきたことです。広大な境内地では相撲や芝居の興行がおこなわれ、立町は数少ない娯楽の場としてさらに賑わいを加え



皇大神社

がかわってしまふなど、昔ながらの景観が失われたのは残念というほかありません。それでも、皇大神社の

ました。明治になって、米沢初の劇場ができたのも立町です。

もうひとつは、大正の大火後に新道がひらかれたことです。十字路ができて交通至便となり人出は倍増、立町は、当時の米沢市長に「米沢銀座」といわしめるほどの賑わいを見せるようになります。しかし、その一方で、皇大神社の参道筋



立町通り・桐町通り界限



常夜燈

桐町T字路の東側、平和軒と西蓮寺の間にある赤レンガ造りの塔は、街路灯のさがけともいえるモダンな常夜

赤レンガの常夜灯

ると、この竹は米沢城の土居に人為的に植えられていたのでは？直江兼続が指示したのかしら…などと、想像もふくらみます。

桐町公園

商工会議所わきの小道に入り、住宅街の中を北へ進んでいくと、ふと風景に違和感を覚えます。住宅の二階と同じ高さに、朱塗りの鳥居とお宮が見えるからです。

このお宮は五穀稲荷神社、桐町公園内の小高い丘の上に鎮座しているため、そのように見えてしまうのです。なぜ、こんな小さな公園にそのような丘と神社があるのかというと、それは、そこが西條天満神社と同じ米沢城三の丸土居の遺構だからです。ちょうど城の北東、鬼門に

足をのびるで……

境内は往時と変わらず鬱蒼とし、一步足を踏み入れると古き良き時代にタイムスリップするかのようです。



桐町公園に残る三の丸の遺構

竹はその地下茎で土をしっかりと抱え込むので、土地が崩れにくくなります。このようなことを考えあわせ

あたることから、鎮護のために神社を配したのではないかと、言われています。ここで興味深いのは、丘の斜面に群生している矢竹です。この竹は、あまり大きくならず、節の間隔が広いことから、矢柄として利用されていました。また、

灯です。明治二十九年（一八九六）日清戦争の勝利を記念して建てられ、西蓮寺の門前に奉納されました。中は空洞で、石油ランプが釣瓶のように鎖で吊り下げられており、これを夜な夜な上下させて点灯したといえます。ところで、「西蓮寺の門前」と書きましたが、一見すると門前とは思えないところ、この常夜灯は建っています。実は、このT字路の東にのびる通りは、大正の大火後に西蓮寺の境内を突き抜けて開かれた新道で、この常夜灯のそば、すなわち現在道路になっているところが西蓮寺の旧来の門だったのです。この常夜灯は、かつてはL字形の角にあり、桐町全体を照らしていたので



こぼれなし 2

商店名の由来あれこれ

名は体をあらわす、といえます。名前には何かしらの由来があるものです。ここでは、米沢の老舗の名前の由来をいくつか紹介しましょう。

元禄二年（一六八九）創業という大清は、屋号の大・阪屋と店主名清・兵衛、それぞれの頭文字をあわせたもの。同じような例は多く、立町の魚伊は鱈屋Ⅱ魚屋の越後屋伊・三郎、鞆町にあった福忠呉服店は福・島屋忠・蔵、ナカタ薬局は名字由来と思いきや、これも当主名中村太次郎からの命名です。現代の「キムタク」



大清

「マツケン」などと同じパターンということに気づかれたでしょうか。

米沢人に限らず、日本人は一般にこういった略しかたが好きなようです。

もちろん、そうでない由来の店もあります。明和七年（一七七〇）創業の和泉屋は、屋号がそのまま店の名前に。正徳二年（一七一二）にはすでに営業していたという粉名屋小太郎は、初代の蕎麦打ち名人小太郎にちなんでいます。明治三十年（一八九七）創業の茨城屋茶店は、初代が茨城県出身であることに由来するそうです。



旧福忠呉服店

昔の商店あれこれ

スーパーマーケットなどがない江戸時代、人々はどのような商店で買い物をしていたでしょうか。

まずは食料品店から。米を扱っていたのは米屋ですが、江戸中期頃までは卸売りの源吾屋と小売の搗屋に分かれていました。野菜は八百屋または青物屋、魚は鱈屋です。イサバとは普通「五十集」と書き、漁場もしくは魚屋のことをいいますが、これに「鱈」という字をあてはめるのは米沢独特のこと。鮮魚はほとんど干物塩漬が中心でした。肉を商う店はなかったようです。当時、肉食は表向き忌避されていたので、商売とするのは難しかったのかもしれませんが、ただし、江戸な

ふともの
どの大都市部には百肉屋と呼ばれる肉屋があり、ぼたん（猪肉）もみじ（鹿肉）などを扱っていました。

衣料品は、太物屋と古手屋がありました。太物屋は太物Ⅱ反物を扱う店、古手屋はいわゆる古着屋です。当時、衣服は各家庭で女性が手作りしていました。新品の反物から仕立てることは稀で、ほとんどは古着をほどこいて縫い直していたといえます。そのため、商品の数としては古手屋が圧倒的に多く、太物屋は、今の高級ブランドショップのような存在だったのではないのでしょうか。

ところで、米沢城下で目立って多かった店は、実は飴屋と煙草屋でした。いつの時代も人はこの手のものに目がな

